

アンコール現地レポート 17

今も息づく技法 4 「線香の華」

以前に比べれば、遙かに良くなったのだが、それでもシェムリアップ周辺の道路は「悪い」と言葉では伝えられないぐらいの悪路である。雨期には、道路の窪みに水が溜まり、それを車がこね返すものだから泥のプールとなり、それが 100m 近くも続くところも出現する。そんな場所には、泥水の中にエンコした車を引っ張り出しては、駄賃を稼ぐトラクターなどが出現する。



雨期の国道 6 号線（シェム・リアップ - シソフォン間）

まあ、そんな状態だから、「車に乗って旅をする」といっても日本のように快適ではなく、車中を飛び跳ねながらのドライブとなる。（それでも、いつもとは違う景色が目の前を通り過ぎ、興味ワクワクの旅には変わりはないのだが.....）



路傍に咲く黄色い「線香の華」

今回は、そんな状況の中でも目に付く道端の黄色い「線香の華」について触れてみたい。「線香の華」と言われても、多分、何だか分からないだろう。それは束ねて根元が結ばれ、上部が広がってまるで華が咲いたようになっている線香の束のことである。写真からも窺える通り、カンボジアの線香は日本の線香とは違って長い。軸に割竹を使った長さ 30cm ほどのものである。この線香の束が路傍に出現する。もちろん売り物であるが、草木の緑が基調の風景の中では、「黄色の蛍光」という華やかな色のため一際目立つ。

いつもは相乗りで、車を止めるわけにもいかず、気にしながらも通り過ぎていたが、今回、ちょっと機会があつたもので、車を止めて作り方など話を聞いた。

予想外だったのだが、線香の基本材料はプノンペンから買ってきているということだった。作り方は次の通りである。プノンペンから仕入れた線香の基本材料に大鋸屑おがくずと水を混ぜて練り、線香のペーストを作る。それに線香の芯となる細い割竹を漬け、表面にペーストを付着させて一昼夜乾燥させる。作業は、空気の乾燥する深夜1時頃から明け方に行く。線香の束は、カンボジアらしくて良いのだが、目分量で手で軽く握ったものを一束とする。この一束が500リエル(日本円で15円)で出荷されているのだという。



線香を束ねて括る作業。カンボジアは何処でも子供が良く働く。



カンボジアのお盆(ボン・ブーン・プノン・クサエ)での風景。砂山に多くの線香が捧げられている。(アンコール・トム、2001年5月7日)

カンボジアのお寺へ行くと、人々が線香を捧ささげる姿をよく目にする。線香を捧ささげる本数は通常3本だが、これには意味がある。私の知り合いのカンボジア人によると、この「3」という数は、基本的には、1. Buddha(ブッダ)= Human(人)、2. Dharma(ダルマ)= Nature(自然)、3. Sangha(サンガ)= Social(社会)を表すそうだ。もっとも、この「3」の組み合わせには、両親と自分と第三者など様々な事例があるという。日本でも、私は線香を3本ずつ供えてい

たのだが、その意味は意識しなかった。同じような意味があるのだろうか？

2001年10月28日

シェムリアップ、上智研修所にて

荒樋 久雄